

六月の花嫁

「ついてないな」

若葉は、ほうきにあごをのせて、ため息をついた。となりで、机をごしごし拭いていた雪江ちゃんがくすくす笑う。

「若葉ちゃん、今日さんざんだったもんね」

まず朝寝坊して、遅刻しそうになったのがいけなかったわね。心の中で一つ指を折る。

あわてて、家を飛び出して国語の教科書を忘れた——、これが二つ目。

数学で、難しい問題をあてられて黒板とにらめっこ。三つ目。

英語の宿題を忘れてた。四つ目。

また、大きなため息が出た。

「でも、宿題忘れるなんて若葉ちゃんらしくないね」

「うん——。昨日は、それどころじゃなかったのよ。母さんがまた倒れてね。入院することになったの」

雑巾がけの手を止めて、雪江ちゃんはまじまじと若葉の顔を見た。

「なら、先生にそう言えば良かったのに」

「だって、忘れたことには変わりないもん」

のんびり言って若葉は床を掃きだした。

若葉は、ちよつと変わった女の子だ。まだ13才なのに、大人の女の人みたいに落ち着きはらっている。

小さい頃からお母さんが病気がちだったので、料理や洗濯といっしょにいつのまにかそんな雰囲気身に

ついでしまったのかもしれない。

「拓ちゃん」

教室の隅にかたまってる男の子たちに若葉は声をかけた。

「ちゃんと掃除しなくちゃだめよ」

言っていることはお母さんみたいなのに、のんびりと若葉が言うとまるで小学生が中学校のお兄さんをたしなめているように聞こえる。——バランスがとれていいじゃない。雪江ちゃんならそう言いそうだ。

「雨降りそうだね。若葉ちゃんかさ持ってる」

「ううん」

若葉はまたため息をつきそうになった。今日が掃除当番だったこと——若葉の心の中でついていないことは、とうとう「ぐう」になってしまった。

ゴミを教室の真ん中に掃き集めながら、若葉は男子たちに声をかけた。

「ちり取りくらい持っても、ばちは当たらないと思うよ」

背高のつぽの安井君がめんど臭そうにロッカーからちり取りを出して来て、若葉の集めたゴミの前に置く。

「ちゃんと傾けてね——。上手く掃き込めないから」

手際良くちり取りに掃き込みながら若葉は言った。気の早い男子たちが、教室の後ろに寄せていた机を元に戻し始める。

「若葉、いいもんやるよ」

背中から声がしたので、手を止めて若葉は振り向いた。

「なあに、拓ちゃん」

若葉は、見上げながらちよつと首をかしげた。チビすけの若葉は、拓也の首のあたりが目の高さになつてしまふ。

拓也は、若葉の隣の家に住んでいる男の子で生まれた時からの知り合いだ。――「正確に言うくと、若葉ちゃんの方が拓にいちちゃんより半年お姉さんだから、せいご6カ月からの知り合いね」などと、拓也の妹の靖ちゃんなら言いそうだが――。

「これやるよ」

拓也は、チョコレートの箱を若葉に手渡した。

「どうして」

不思議そうに若葉は、拓也の顔を見ながら、箱のふたを開いた。

「キヤツ」

ふたを開いた途端、指に強い電気が流れて若葉は、チョコレートの箱を放り出した。

いつのまにか、周りで息をつめて見ていた男子たちが歓声をあげる。

「よくできてるだろ」

足先でふたを閉じて箱を拾いながら拓也は得意げに言った。

「乾電池の電流を交流に変えて、増幅装置っていう部品で強くするんだ。今月の小遣い全部使っちゃったけど――」

若葉は、じつとうつむいたまま顔を上げようとしな。言いかけて、拓也は口をつぐんでその顔をのぞきこんだ。

どうしてなのか、若葉にもわからなかったけれど、涙があふれてきて止まらなかつた。こらえようとしても、のどがヒクヒク鳴った。こめかみがジンとうずいて生温かい涙が後から後から頬を伝うのがわかつた。

すつかりぼやけた焦点に拓也の顔が映った。何か言おうとしているらしいのだが、何を言えいいのかわからない風だつた。

『何でもないよ。大丈夫だから』

のどがつかえて、それだけの言葉がなかなかしゃべれない。目の前で一所懸命あやまろうとしている拓也を見ていられなくて若葉は横を向いた。――別に拓ちゃんのせいじゃないんだよ。ヒクヒク鳴る自分ののどが歯がゆい。

だから、やつとの思いで拓也が若葉の肩に手をかけたとき、ビクンと体を震わせた若葉はそのまま教室を飛び出してしまった。泣き声がとうとう口をついて出る。こんなとこ、みんなに見せられないもん。歯を喰いしばつてこらえながら若葉は廊下を駆け抜けた。

2

校門のところまで若葉は石をけりながら考え込んでいた。――カバンどうしようかな。教室には戻りづらいし、カバンを放つたらかしにして帰るのも気がひけた。

いや。今日は、宿題出なかったし、カバンがなくても困らない——ビー玉くらいの砂利石を一つけ飛ばして若葉は歩き始めた。

校門前の交差点を渡って真っすぐ行くと電車の駅に出る。そこを左に折れて駐輪場を過ぎると、駅前商店街だ。商店街の真ん中に立っている大時計を見上げて若葉はまたため息をついた。5時15分——。早く帰って夕飯の支度をしなければいけない。お父さんが工場から6時には帰ってくる。

肉屋と、八百屋で手早く材料を買ってアーケードを抜けた途端、今日いくつ目になるかわからない『ついてないこと』が空から降ってきた。先週の天気予報で梅雨入りが宣言されていたけど、昨日までは一滴も降らなかったくせに——。若葉は唇をかんで、恨めしげに空を見上げた。

春先によく降るような小糠雨で、どちらかと言うと霧に近いようなつぶの細かい雨だ。ひと筋向こうの通りを、どこかの高校生が頭にカバンをかかげて、駆けていくのが見えた。

すぐ止むんじゃないかな。そう考えて若葉は雨の中を飛び出して行った。

五分後——。若葉はシャツターの閉まっているタバコ屋の軒先に立っていた。目の前で夏の夕立のような雨が降っている。心底また泣きたいような気持ちになった。ちよつと油断すると、すぐにのどが鳴りだしそうだ。

遠くで終鈴が聞こえる。若葉の中学校の部活員に下校を促す合図だ。五時四十五分——もうすぐ夏至なので本当ならまだまだ明るい時分のはずなのに、すっかり薄暗くなった空に応えるように街灯が雨足の向こうで一つままたいて灯った。

「どうしよう」

口をへの字に曲げて、若葉はつぶやいた。家までは駆け足でも15分はかかる。容赦ない雨足をそろっとのぞき込むように若葉は首を突きだした。その途端首筋に冷たいものが落ちてきたので慌てて首をすくめた。

雨垂れかしら、反射的に衿のあたりに手を伸ばした若葉の指先に冷たいものが触った。何か薄っぺらい金属でできたものだ。服に入り込まないようにそろっと指でつまんだ。

首筋に降ってきたのは鍵だった。

でも変な鍵ねえ——。若葉が思ったのも無理はない。全部で4センチ足らずのちっぽけな鍵なのだが、そのうちの2センチくらいが丸い形をした持ち手になっているのだ。肝心の鍵の部分と不釣り合いなので誰でも首を傾げてしまう。

薄い円盤になっているその持ち手には若葉が見たことのない文字——アルファベットじゃないわねと思っただ——が刻まれていた。持ち手に比べて小さく見劣りする鍵の方は、それでも先の方に小さな枝が沢山でていて、複雑な形をしていた。

どこから落ちてきたんだろう——、もう一度若葉は首を伸ばしたが雨が激しく降ってくるばかりだ。もう一度鍵に目を戻してからポケットに入れた。捨てるのは気が引けたし、——もともと物を捨てるのが苦手な質なのだ——誰かに返すにも周りには誰もいなかったからだ。

雨は一向に止まない。大きく息を吸い込むと思いい切って若葉は走りだした。

家に着いた時には袖からもスカートからもぼたぼた水が落ちていたし、髪の毛はべったり顔にくっついていた。三和土にはたちまち小さな水溜まりができたが、構わず下駄箱をあけて雑巾を出した。靴と靴下を脱ぐと手早く足を拭いて玄関に上がった。

五分もすると濡れた衣類は風呂場で干され普段着に着替えた若葉はタオルで髪を拭いていた。いつものまにかそんな段取りの良さが当たり前に身についているのだ。だから6時半を過ぎて拓也が顔を出した時には夕飯の支度はひと区切りついて、出来上がりを待つばかりになっていた。

「——ごめんな」

若葉のカバンを手渡しながらしきりに拓也は繰り返した。

「ううん——。ちよつと疲れてただけだから——」

あんな風に若葉が飛び出してしまったから女子の槍玉に上がったんじゃないだろうか、カバンだって半分は無理矢理持たされたのに違いない。そんな風に考えると若葉は却って申し訳ない気がした。

「おばさんは？」

玄関からのぞき込んで拓也は聞いた。

「ゆうべ入院したの」

まじまじとエプロンを掛けた若葉を見下ろしながら、

「お前ん家も大変だなあ——、何か手伝うことないか——」

「いいよ。もう夕飯の支度も済んじゃったし」

「ふうん——」

拓也はまだ何か言いた気に若葉の足元をもじもじと見詰めていた。

「本当に——」

若葉はくすくす笑い出してしまった。

「大丈夫だってば。電気びつくり箱のことは気にしないで。でも——、誰かれなしに試しちゃだめよ。人によったら危ないかもしれないじゃない」

若葉は見上げるようにして拓也をちよつとにらんだ。

「わかったよ。本当にお前はうちの母さんみたいだな」

言いながらそれでも、ほっとした顔になって拓也は帰って行った。

台所に戻って煮物の具合を見ていると電話が鳴った。若葉の肩がびくつと震える。病院だろうか？
急いで濡れた手をタオルでふき、玄関の横の電話にかけよった。

「もしもし——」

「若葉か」

「何だお父さんか。病院から電話かと思っちゃった」

「何だはないだろう。今日残業になりそうなんだ。悪いが夕飯を先に食べておいてくれないか」

「——わかった」

「何時になるかわからんから、戸締まりをしつかりな」

「うん」

すぐに現場に戻らなければならないのだろう。用件だけ告げるとお父さんは電話を切った。若葉は受

話器を置きながらため息をついた。しばらく、うつむいたまま身じろぎもしない。いったいついてない事は、いくつ目になったんだろう。

若葉のお父さんは工場勤めだから毎日6時に帰ってくる。ところがたまに機械の故障や何かが起きると修理のために残業をすることになる。そうになると、もう何時に帰ってくるのか分からない。ときには徹夜することだってあるのだ。

若葉はお父さんの食器をしまいながら下唇をかんだ。今日は本当に疲れているらしい。ご飯を食べてもちつともおいしくないし、楽しいことを何か思い浮べようとしても一向に『楽しいこと』は浮かんでこなかった。

それでも洗い物を済ませてお風呂に水を入れる頃には少しは気分が晴れて、読みかけの小説でも読もうかなという気分になってきた。

一人っ子で、しょつ中鍵っ子のような夜があるというのに不思議なほど若葉はテレビを見ない子だ。生れつき——と自分でも思っているのだが——空想癖があつてあれこれ想像することが大好きなのでテレビよりも自分で好きなように情景を描ける読書の方が性に合うのだろう。

台所の隣の4畳半が、若葉の勉強部屋だ。蛍光灯を点けて机の横の本棚に手を伸ばそうとした若葉の目の端に小さな黒いものが映った。

そうそう、すっかり忘れていたなあ。若葉は心の中でつぶやいた。タバコ屋の軒先で拾ったあの小さな鍵を机の上に置いていたのだ。とりあえず、小説は後回しにして椅子に座った。電気スタンドを点けると、改めて持ち手に刻まれている不思議な文字に目を凝らした。

英語でも中国語でもない。アラビア文字？違うような気がする。

何の鍵だろう。セカンドバックか小物入れにしては大きすぎる。でも扉の鍵にしては小さすぎる。それに細い心棒にいつぱいついた小さな枝。よっぽど複雑な仕掛けの鍵よね。若葉は忙しく空想をめぐらせた。大きさといい形といい何の鍵といっても似合わない。けれど、何の鍵といつてもうなづけてしまうような気もする。何の鍵でもなくて何の鍵でもある不思議な鍵。

ふつと若葉の口元がほころんだ。どんな嚴重な錠前でも、たちどころに開いてしまう魔法の鍵：

・。いたずらっぽい目で若葉は部屋の中を見回した。そう考えると何かで試してみたくなったのだ。何か鍵のついたものなかったかなあ。

——あつた。若葉の目は本棚の上の飾り棚で止まった。ガラスの引き戸を開けて両手を入れると、そろっと小物入れを出した。飾り棚には、他にもガラス細工の動物や人形が沢山並べてあるのでうっかりすると手が当たって落ちてしまうのだ。

若葉は、いそいそと小物入れを机の上に置いた。四角い箱にかまぼこ型のふたのついた大昔の旅行トランクのような形をしたこの小箱は若葉の宝箱だった。箱の四方は、ヨーロッパの森の風景が浮き彫りになっていて、鹿や兎が走っていたり、牧童が娘と踊っていたりする。でも中はもつと見事だったのだ。目の醒めるようなぶどう色のビロードが敷き詰められていて、ふたを開けると若葉の大好きな「ロンドンデリー」のオルゴールが鳴った。

お母さんが初めて入院したとき——若葉がまだ三歳の頃だ——、夜になると若葉はよく布団の中で寂しがって泣いていたらしい。お父さんが、その話をお母さんに伝えたのだろう。体調が持ち直して久し

ぶりに家に戻ってきたとき、お母さんの小物入れだったこの箱は若葉に譲られた。いつのまにか若葉は子守歌がわりに「ロンドンデリー」を聞くようになっていた。若葉はこの箱のなかにビーズや綺麗な色のガラスのかけらを入れては、鍵を掛けて大事にしたものだ。

あれは若葉が小学校の2年生の頃だっただろうか。やっぱり梅雨時の集中豪雨で学校が休校になった日、家の前で遊んでいて――雨は昼前に上がってしまった――、若葉はうっかりポケットに入れたままにしていた宝箱の鍵を溝に落としてしまった。折からの増水で鍵はあつという間に流れていつてしまった。若葉はわあわあ泣きながら捜したけれど結局見つからなかったのだ。

だから、この箱はその日から一度も開いていない。

若葉は、鍵をつまむと恐る恐る小箱の鍵穴にあてがった。けれどすぐにため息をついてまた鍵を置いてしまった。こんな四方八方に枝の伸びた鍵がこんな小っちゃな穴に合うわけじゃないじゃない。

でも、もし本当に魔法の鍵だったら――。若葉はもう一度鍵をつまみ直すと鍵穴にあてがってぐっと押してみた。

「えっ」

若葉は思わず声を立てた。四方八方に伸びた枝はまるで蝶番がついているようにパタパタと倒れて何の抵抗もなく持ち手のところまで鍵穴のなかに納まってしまったのだ。持ち手をゆつくりと回してみる。

――カチッ――。(鍵が開いた。)バネ仕掛けのふたが勢いよく開く。

一瞬「ロンドンデリー」が流れだしたような気がして若葉は、耳をそばだてた。けれども空耳だったみたいだ。ふたの開いた宝箱からはいつまでもたってもオルゴールは流れてこなかった。

どうしたのかしら——若葉は中をのぞき込んだ。ビーズもガラス玉も見えない。黒くて四角い穴がぼつかりと開いているだけだった。

宝箱を持ち上げて静かに振ってみる。さらさら、カチカチ——ガラスのぶつかり合う音が確かに聞こえる。改めて机の上に置き直してのぞき込むとやっぱり黒い穴が開いている。

変なの——。若葉は、首を傾げてちらちらと盗み見るようにその穴に目をやった。じつとのぞき込んでみるとその穴に引き込まれてしまいそうな気がしたのだ。

できるだけ箱の中を見ないようにしながら、そろそろと手を伸ばして鉛筆立てから一番長い鉛筆を抜き取った。何となくこの黒い穴が底なしのような気がして、試してみたくなったのだ。手を伸ばして鉛筆を箱の真上に持つて行くと、真つすぐに立てて黒い穴へとゆっくり下ろしてゆく。

手元まで突っ込んででもまだ底に当たらなかつたらどうしようかな——少し胸を弾ませて半ばそんな想像をしていた若葉は顔をしかめた。カツンと音を立てて鉛筆は箱の縁で何か硬いものにぶつかってそれ以上突っ込めなかつたのだ。恐る恐る指で触ると、まるで箱の縁にそってガラスが張ってあるような冷たい感触が伝わった。どうやらその向こうの黒い穴は、こちらからは触れられない世界みたいだった。

いったいこれは何なんだろう。いつの間にか若葉は、この不思議な黒い穴に夢中になっていて、疲れていたことも、淋しかったことも忘れていた。指で二度、三度その見えないガラスを弾いてみる。それから今度は、指の腹でなでてみて冷たい感触を楽しんだ。と、急にガラスの向こうが明るくなった。若葉は慌てて指を引っ込める。見てはいけないものが現われるような気がして目をそらせようとするのだがうまくいかない。白く光っている宝箱に釘づけになったままだ。

拓ちゃん——？ガラスの向こうに拓也がいた。畳み敷きの部屋の蛍光灯をつけたところらしい。ガラスの向こうの拓也はそのまま部屋の隅の机の方に歩いていった。机の横に立ってかけてある学生カバンを開けると例の電気びっくり箱を取り出した。机の隅にのっている布きれでチョコレートのふたを開けると中から薄い板を引っ張り出した。板には四角くて黒い部品や細長くて茶色の地に赤や黄の縞模様の入った部品がくっついていて。拓也は左手でその板を支えておいて右手で黒いスイッチを切った。パチンと音がして、若葉は向こうの景色から音が伝わってきていることを初めて知った。

テレビみたい——。若葉は思った。でもこの光景はいつたい何なんだろう。宝箱の向こうでは、はんだごてを温めていた拓也がさっきの板にくっつけていた部品をバラしはじめていた。

本当に好きねえ——若葉は、思わず笑ってしまう。拓也がラジオのスイッチを入れたので見えないガラス越しに音楽が聞こえてきた。でも当の拓也自身はその音楽が耳に入っているのかどうか忙しく手を動かすことに熱中している。

もつと見ていたけれど——。我にかえった若葉は、そう思いながらも急いで宝箱のふたを閉めた。何だかのぞき見をしているような気がしてばつが悪かったのだ。

今見た光景が何だったのかは分からないけれど、これは正真正銘の魔法の鍵なんだわ。若葉は改めて鍵をつまむと、持ち手の不思議な文字に目を凝らした。その文字を指でひと撫でしてみる。

やおら立ち上がって洋服ダンスの引き出しを開けると、一番お気に入りレモンイエローのハンカチを取り出した。鍵の先をつまんで静かに息をはきかけて、ハンカチの隅でこする。それから、ハンカチで丁寧に包むと勉強机の引き出しにしまった。何となく大切に扱わないといけない気がしたのだ。

落ち込んでいたのがうそのように気持ちが悪くなって、てきぱきと体が動いた。お風呂を沸かして、乾いた食器に布巾をかけて、片付けて、お風呂に入って――、急に疲れが戻ってきたようで若葉はぐっすり眠った。

3

次の日若葉が目をさましたとき、お父さんはまだ帰っていない。徹夜だったらしい。支度をすませてテーブルの上のお父さんのご飯に布巾をかぶせて、若葉は家を出た。

「お早よう」

玄関に鍵をかけていると拓也の声があった。若葉が振り返ると生け垣から拓也が首を突き出していた。

「お早よう」

「これやるよ」

拓也は、手を伸ばしてチョコレートの箱を差し出した。

「だって、それ――」

「夕べ改造したんだ。もう電気びっくり箱じゃないから」

ちよつときまり悪そうに拓也は笑った。少し迷ったけれど結局若葉は生け垣の方に歩いて行った。

「開けてみなよ」

箱を若葉の手の中に押しつけるようにして渡しながら拓也は言った。若葉はちよつと目を細めて上目づかいに拓也の目を見る。それからもう一度チョコレート箱に目を戻してふたの縁に爪を引っ掛けるようにして恐る恐る開いた。

途端――、若葉の体は小さく震えた。箱からは電気の代わりに耳馴染みの音楽が流れてきたのだ。

「ロンドンデリー」だわ。少し甲高いその音を聞き分けるのにいくらかひまがいった。

「その曲好きだつて言ってたろ。あげるよ」

若葉は、もう一度拓也を見上げた。よく見ると目が赤い。――徹夜したのかしら。若葉が口を開いて何か言おうとすると、さえぎるように拓也が急いで口を開いた。

「じゃあ、先に行くから」

よほど照れくさかったのか拓也は、慌てて背を向けると走って行ってしまった。

ロンドンデリーが好きだつて言ったのは、オルゴールの鍵を失くす前じゃない――。よく憶えていたなあと、若葉は変なことに感心した。

学校に向かつて歩きながら若葉はやつと気付いた。あの不思議な鍵が見せてくれた宝箱の中の光景は、現実起こっていることを映し出していたんだと――。

その日は1日中、拓也はうつらうつらとしながら過ごしていた。斜め後ろに座っている若葉は気を揉み

通しで、先生の注意が飛ぶたびに自分が叱られているみたいに首をすくめた。

ようやく、6時間目が終わって若葉はほっとしながら帰り支度をはじめた。拓也は授業の終わりの礼もそこそこに教室を飛び出していったので若葉の斜め前はとうに空席になっている。訳もなしに若葉はため息をひとつついた。

「ねえ若葉ちゃん、屋台に寄っていきようよ」

雪江ちゃんが背中を突つついた。

「うーん、どうしようかなあ」

壁の時計を見ながら若葉は迷った。女子の間では駅前やって来るクレープの屋台がもつぱらの噂になっている。――三時二十分か。夕飯には充分間があるわ。

「よし、行こうか」

若葉はふりかえると笑って言った。

「お母さんの具合どう」

校門を出てぶらぶら歩きながら雪江ちゃんが尋ねた。

「まだ病院に電話してないから詳しいことはわからないの。でも、しばらくは、また入院になると思うな」
「大変だねえ」

「うん。でももう慣れちゃったからそうでもないよ」

若葉はいつものようにのんびりと答えた。学校から駅までは5分足らずの道のりだからほんの少しおしゃべりをすればもう駅舎の大時計が見えてくる。空色と白の縞模様染めたキャンバス地の屋根が目印

の屋台が駅前のロータリーの隅に停まっていた。

「二、三人しか並んでない。急ぐう」

雪江ちゃんが若葉を急かす。

「若葉ちゃん、つきが戻ってきたんじゃない？あんなに列が短かったのあたし初めてだよ」

ベンチに並んで腰かけながら雪江ちゃんが言った。

「うん。いつも十人くらい並んでるもんね」

「今日ねー」

雪江ちゃんは、クレープのなかのアイスクリームとオレンジソースをこぼさないように注意深く口を開いた。

「拓也くん、居眠りばかりしてたでしょう。小林先生がチョークを飛ばしたときは、昨日のバチが当たったんだわって思っちゃった」

言ってからふふつと雪江ちゃんは独特の笑い方をした。

「でもー、昨日私が泣いちゃったのは拓ちゃんのせいじゃないんだよ」

クリームチーズとあんずのソースを上手に頬張りながら若葉は言った。

「それにね、拓ちゃん責任感じちゃったみたいで今朝これをくれたの」

若葉はかばんをぐそぐそ探ってチョコレートの箱を引っ張り出した。

「それ、昨日の電気びっくり箱じゃない」

「ううん」

若葉はひぎの上に広げたハンカチの上にクレープを置くと箱のふたを開いた。ロンドンデリーが流れだして、雪江ちゃんは目を丸くした。

「たぶん徹夜で作ったんだよ。だから先生が注意するたびにハラハラしちゃった」
「ふうん」

雪江ちゃんは、にやにや笑いながら若葉の顔をのぞき込んだ。

「何よう」

「ううん。いいなあと思っただけよ」

目を見交わすとなぜかおかしさが込み上げてきて、二人はひとしきりくすくす笑いをした。笑い疲れると雪江ちゃんはチョークを飛ばした小林先生の噂話を始めた。

若葉が家に戻ると丁度お父さんが起きてきたところだった。徹夜の次の日は休みが取れるのだ。若葉は手早く支度をして、お父さんと一緒に夕飯を食べた。

箸を動かしながら、お父さんとお母さんの具合のことを話してくれた。お昼前に病院に電話して尋ねたのだそうだ。先生の話では一週間程で退院できるだろうと云うことだった。――本当につきが戻ってきたのかしら？若葉は小首をかしげて考えた。

部屋に戻ると若葉は机の引き出しを開けてレモンイエローのハンカチを取り出した。広げるとあの鍵が出てくる。じっと見ているうちに、あの宝箱のふたを開けてみたい誘惑で若葉の心はむずむずしてきた。

慌ててハンカチをたたむと又、引き出しにしまう。

でも、この鍵は私に『いいこと』を呼び寄せてくれたみたい。チョコレートのかたまりを開けてロンドンデリーを聴きながら若葉の口元は自然とほころんできた。

5

次の週の土曜日は朝から雨が降っていた。雪江ちゃんが一緒に宿題をやらうと誘ってくれたけれど、若葉は「今日はだめなの」と断って急いで家に向かった。二日遅れたけれど今日はお母さんの退院の日なのだ。

二日前に若葉は久しぶりにお母さんの見舞いに行った。

「少し熱があるから大事を取って先生がおっしゃるのよ」

退院が延びたことを話すお母さんの顔は少し赤かった。

「いいよ、二日くらいすぐだし無理しないほうがいいよ」

若葉は笑いながら応えた。気に病んでいるお母さんを見ると何だか若葉の方が申し訳ないような気がしてきたのだ。

「帰ったらお母さんの特製オムレツ作ってあげるから楽しみにしてなさいよ」

とお母さんが言うのと、

「そんなに気を遣わなくていいから寝てなさい」

どっちがお母さんなのかわからないようなことを言って若葉は舌を出して笑った。つられてお母さんも笑ったので若葉は少しほっとした。

「ただいま」

玄関を開けながら若葉は奥に向かって声をかけた。返事が――、返ってこない。若葉は首を傾げながら靴を脱ぐと三和土に傘を広げて家の中にも上がった。朝のうちにお母さんは帰ってきているはずなのだ。台所を覗き込むと茶だんすにお父さんのカバンがもたせてあるのが目についた。一度帰ってきてすぐに出かけたらしい。玄関に靴がなかったことを思い出しながら若葉は考えた。テーブルの上に公告の裏に走り書きしたメモが置いてあった。

お母さんの容態が良くないようなので病院に行ってきます。病院からまた電話するから、心配せずに留守番をお願いします。

お父さんの角張ったくせのある字でそう書かれていた。体中の力が抜けていくような気がして若葉は壁にもたれかかった。そのまま、ずるずると背中を滑らせて床に座り込む。

病院から工場に電話があったんだ。――早退けして駆け付けたくらいだからもしかしたらお母さんの加減はひどく悪いのかもしれない。若葉は、三年前にお母さんの危篤状態が三日も続いた時のことを思い出した。

不吉な想像が胸のなかに広がっていく。一度生まれだすと、次から次へと不吉な影は際限なしに浮かんできて若葉の頭のなかで渦を巻いた。

打ち消すように首をひとつ振って若葉は立ち上がった。その勢いで自分の部屋に歩いて行き私服に着替える。それから、急いで玄関先に出ると電話の前に立った。受話器を取りかけてまた下ろす。容態が本当に良くないのなら誰も電話に出ているどころじゃないだろうし、そうでないなら待っていればいい。お父さんのメモを思い出してとっさにそう自分に言い聞かせた。

少しは気が紛れるかもしれない。そう思って台所に戻ってお昼の支度をすることにした。何かあったかなあ、考えながら冷蔵庫を開けた。けれどまたすぐに閉じて、椅子に座り込んでしまった。昨日買ったおいた卵が扉に並んでいたのだ。特製オムレツなんか別にほしくないよ。窓を打つ雨をぼんやり眺めながら心の中でつぶやいた。また不吉な影たちが頭をもたげ始める。

不意にある思いつきが渦を巻いている影たちの横をかすめた。いま、何を考えたのかしら？その思いつきが何だったのかすぐには分からなくて、若葉は眉間にしわを寄せて気持ちを集中させた。

とつぜん、気付いて若葉は立ち上がった。急いで部屋に戻ると机の引き出しを開けてハンカチを取り出した。ハンカチを広げると魔法の鍵が出てくる。急いで本棚の上から宝箱を下ろして机の上に置いた。――ガラスの動物達がカタカタ音を立てて子豚が一匹畳の上に落ちたけれど拾うのは後回しにした。

鍵を鍵穴にあてがうと迷わず押し込む。小さな枝分かればまたパタパタと倒れて鍵穴の中に吸い込まれた。鍵をひねるとふたが勢いよく開いた。

「拓也早くしなさい。安井くん、待っててくれるわよ」

箱の向こうから拓也のお母さんの声が聞こえてきた。

「わかってるよ」

面倒臭そうに返事をする拓也の声が聞こえた。その後ろ姿が宝箱の向こうを横切る。手提げ袋に何か細々したものを忙しそうに詰め込み始めた。

若葉はゆつくりふたを閉めた。なあんだ——。何となく魔法の鍵がお母さんの様子を映し出してくれるような気がしていた若葉はちよつとがっかりした。

もしかしたらこの鍵の魔法は拓也の部屋を映し出すと云う力しか持たないのかもしれない。変な鍵ねえ。若葉は改めてその奇妙な形をした鍵をしげしげと見つめた。ふとその目の端に机の引き出しが映った。机の一番上の引き出しにはお父さんから預かっている生活費や何かをしまっていて普段は鍵がかかっている。

半ば無意識に鍵を持ち直すと、若葉は引き出しの鍵穴にあてがっていた。少し力を加えると宝箱の時と同じように枝分かれが折れ曲がって鍵は根元まで鍵穴に埋まった。丸い円盤の持ち手をひねる。

——カチリと音がして鍵が開いた。

若葉は恐る恐る取っ手に手をかけて引き出しを引いた。

「本当に申し訳ありませんでした——」

突然耳元で声がして若葉は思わず振り返った。——誰もいない。

「いや、間違いは誰にでもありますから」

お父さんの声だ。はっと気付いて若葉は手元を見た。引き出しの向こうにお父さんが立っていた。病

院の廊下のような。お母さんのお見舞いに行くといつも元気な声であいさつしてくれる五十才くらいの婦長さんがお父さんと話していた。

「でも、あんな間違いをするなんて――」

いつもは元気が白衣を着ているみたいな婦長さんが、しょんぼりしてしまって今にも泣きだしそうな顔をしていた。

「本当にそう謝らんで下さい。実際には何も害はなかったんですし」

お父さんの方も何だか気まずそうな顔をしている。

「娘に電話をしてきます。心配していると思いますから」

廊下を歩いて行くお父さんの靴音が響いた。若葉は慌てて立ち上がると部屋を出て電話の前に走って行った。雨はさつきより降りが激しくなってきたようで窓を打つその音が静かな家の中で奇妙に際立って聞こえる。

リン：「

鳴ると同時に若葉は受話器を取った。

「もしもし」

「若葉かい。ずいぶん早いな――」

面喰らったようなお父さんの声が響く。

「電話の前で待っていたの。お母さんの具合は？」

「ちよっと風邪気味だけど元気だよ、また二日延びるけど月曜日には退院できるそうだし」

「でも……。わざわざ工場に連絡があったんでしょ」

「病院の手違いだったんだよ。ほら隣の病室にうちと同じ苗字の佐山さんて云うお婆さんがいらっしやるだろ」

「うん。よくお爺ちゃんがお見舞いにきて、仲良くおしゃべりしているところを見かけるよ」

佐山のお婆ちゃんとお爺ちゃんなら若葉もよく知っている。テレビの洗剤のコマーシャルじゃないけれど、結婚して歳をとったらあんな夫婦になりたいなあと、けさ雪江ちゃんに話したばかりだ。

「その佐山のお婆ちゃんが今朝方から具合が悪くなりだしたらしいんだ。かなりのお歳だから念のために家族に連絡することになったらしい。」

ところが、カルテで連絡先を調べた新米の看護婦さんが1ページ間違えてお父さんのところに電話してきちゃったんだ。

『奥様のご容態が悪化しました。できるだけ早くお越しください』

つて緊張した声で言われた時はびっくりしたよ。それで慌てて病院に駆けつけたんだ」

お父さんの声を聞きながら、目尻から涙がこぼれるのを若葉は感じた。いつからこんなに泣き虫になったんだろう。

「なあんだ」

涙声にならないように気を付けながら若葉は言った。

「それなら学校に連絡をくれればよかったのに」

「ごめん、ごめん。とりあえず様子がわかったら病院から電話するつもりだったんだ。ところが病院に来て

みたらそういう事情だろ。わざわざ学校にかけて心配させることもないかと思っただよ」

「心配したよ」

目尻を手の甲でごしごし擦りながら若葉は言った。

「佐山のお婆ちゃんの場合は？」

「落ち着いたようだよ。さつきお爺さんがいらしてた。これからお母さんの様子を見たら戻るよ」

「あの一ー。今からお母さんのお見舞いに行ってもいいかな」

「でも普通の面会時間はもう一ー。まあいいか。先生にお願いしておくよ」

待っているからと言ってお父さんは電話を切った。部屋に戻った若葉は引き出しをのぞき込んだ。お父さんがお母さんと話している。引き出しの向こうにはお母さんの病室が映っていた。ちよつと顔色が悪いかな。風邪気味だというお母さんは、それでも笑顔を浮かべていて元気そうに見えた。

引き出しを閉じて、ゆっくりと鍵を抜いた。試しに引き出しを引っ張ってみたけれどびくともしない。ちゃんと鍵のかかったままだった。

支度を済ませると、玄関で半乾きになっていた傘を閉じて若葉は外へ出た。病院まではバスで40分かかる。雨の中を歩いて行く若葉の足取りはそれでも軽やかに遠ざかっていった。

月曜日にはお母さんが退院してきて、いつもと変わらない生活がまた始まった。少し大胆になった若

葉は、時々鍵のついたものを探すという変なくせがついた。宝箱は何度開けても拓也の部屋だったし、引き出しは何度開けても、とうに退院してお母さんのいなくなった病院を映すだけだった。ひとつの鍵穴はひとつの風景しか見せてくれないと云うことがだんだん分かってきたのだ。もちろん玄関や教室の扉には鍵がついていたけれど箱や引き出しと違ってそんな大きな風景を開いてしまったら向こうにいる人達がこちらにやって来はしまいかと思つて気後れした。

それでも鍵のついていないものは意外とあつて、周りに誰もいない時にはこっそり鍵を開いて向こうにどんな光景が広がるか見ずにはいられなくなった。

音楽室のピアノのふた。お父さんの出張用トランク。お母さんのセカンドバッグ。保健室の薬瓶の入った箱。魔法の鍵はどの鍵穴にも、さも当たり前と云つた風にすつと入つていった。

ピアノの向こうは、海の中だった。ほの暗い海藻の影から色鮮やかな縞模様の特帯魚が現われて若葉は思わず目を細めた。その背ビレは上の方から射してくる日の光できらきらと輝いていた。雪のように降る小さなプランクトンの粒、鮮やかな色をまとつた魚の群れが忙しそうに、またのんびりと通り過ぎていく。右手に見える大きな岩の影から人魚が現われたとしても若葉はちつとも驚かなかつただろう。まるで音のしない音楽のような時間がピアノの向こうでゆつくりと過ぎていった。

予鈴の音で慌ててふたを閉めたけれど昼休みの間中飽きもせずその小さな海を眺めていたことに気付いて、若葉は自分で自分にあきれてしまった。おかげで、お弁当を食べそこねたので午後の授業中は何度もお腹が鳴つて若葉を困らせた。

お父さんの旅行用トランクの向こうには雪江ちゃんがいる。雪江ちゃんは夕飯を食べながらしきりにお

母さんに学校であったことを話していた。

「――で、若葉ちゃんたらねえ」

拓也の時と同じで、きまりが悪くなって大急ぎでトランクを閉じた。だから雪江ちゃんの言葉は、トランクの向こうで尻切れとんぼに途切れてしまった。

お母さんのセカンドバッグのファスナーを引くと少しゆがんだ楕円形の口の向こうに見たこともない外国の町があった。馬車が通り過ぎる。夕方らしく十歳くらいの男の子がガス灯の灯を点けて回っている。道ゆく人に何か呼ばわっている老人。何を売っているのだろう。老人の屋台からは白い湯気が上がっていた。それは今の時代ではない、ずっと昔の景色のようにも見えた。

ずいぶん長いこと眺めていたけれど、結局どこの景色なのかはまるで分からなくて若葉は何度も首を傾げた。

どうやら、魔法の鍵が見せてくれる風景はいつも若葉にかかわる風景ばかりではないようだった。もしかしたらその外国の町や海の中もちゃんと関係があるのかもしれないけれど、少なくとも若葉には思い当ることがなかった。

薬瓶の箱の中も風変わりだった。四角い箱の中では、畳の上に布いた小さな布団の上で赤ん坊の若葉が眠っていた。

「わが子よ、愛しのなれを……」

洗濯物でも干しているのだろうか。窓の外からロンドンデリーを歌うお母さんの若い声が聞こえてきた。時々、風が入ってくるらしく若葉の顔の上でカーテンの影が静かに揺れた。

遠くの方から自転車の音が近付いてくる。

「ご苦労さま」

郵便屋さんかな。お母さんの声を聞きながら若葉はそう思った。また、自転車の音が遠ざかっていく。そつと、ふたを閉じた。この鍵が見せてくれるのは、今の出来事だけじゃないんだ。棚に箱を戻しながら若葉は改めて思った。

7

次の土曜日は薄曇りのお天気だった。家の裏手に回ってお風呂の種火を点けに行った若葉は軒下の電気箱——電気メータか分電盤か何かだと若葉は思っているのだがよくは知らない箱だ——にも鍵がついているのを見付けた。スカートのポケットを探して鍵を出すと、その小さな鍵穴に差し込んでみた。持ち手をひねると右開きにふたが開いた。

いきなり小学生の頃の若葉がこちらに向かって走って来た。すぐ目の前で跳び上がる。そう云えばゴム跳びが流行っていたつけ。細いゴム紐を横にわたしてそれを跳び越える遊びにすぐ思い当った。背が低かったけれど、ずいぶん高くまで跳べて若葉はこの遊びがお気に入りだった。跳び越える瞬間の体が軽くなるような感覚が何とも云えなかったのだ。

何人かで交替に跳んでいるらしい。懐かしい顔が次々に現われてはこちらに向かって走って来る。道路のあちこちに水溜まりができているところを見ると雨があがったばかりのようだ。

また若葉の順番が回ってきた。だいぶゴムは高くなったらしく走りだす前に息を整えている。少し目を大きく開くと、走り始めた。地面を蹴ってふわっと跳び上がった瞬間に、何か小さな金属が落ちてアスファルトにぶつかる音がした。

「若葉ちゃん何か落としたよ」

きれいに着地した若葉に誰かが——たぶん雪江ちゃんだろう——声をかけた。

「あつ、鍵」

慌ててポケットに手を突っ込んだ若葉は声を上げた。

「溝に落ちたよ」

別の誰かが行った。弾かれるように小さな若葉は溝に駆け寄ったけれど、茶色い水が大きな音をたてて流れていてとても見つかりそうになかった。地べたに四つんばいになりながら一心に目を凝らしていた若葉の顔がくしゃくしゃとなった——。

あつ、泣き出しちゃう。宝箱の鍵を無くした日のことを思い出しながら背伸びをして電気の箱をのぞき込んでいた若葉は思った。

その時、今までにはなかった変化が起きた。いきなり、向こうの場面が切り替わったのだ。茶色い濁流に揉まれながら小さな鍵が流れていく。真っ暗なはずの溝の中はどう云う訳か薄ぼんやりと明るかった。「若葉、お風呂はどうしたの」

家の中からお母さんの声がして、若葉は自分がしに来た用事を思い出した。種火のコックをひねって急いで家のなかに入る。すぐに戻ってくるつもりで電気の箱は開けたままにしておいた。

「悪いけど、てんぷら見ていてくれない。お父さん泊りになりそうだから着替えを届けに来てくれって言うてるのよ」

「はあい」

若葉は笑いながら返事をした。

お母さんが入院している時は一度もそんなこと頼まなかつたに。よっぽどお母さんの顔が見たいのかしら。

てんぷらを揚げているとみそ汁の火加減が気になりだして結局夕飯の支度を全部済ませてしまった。洗い物もきれいに片付けて電気箱に戻ってきた頃にはかれこれ一時間が過ぎていた。そろそろお母さんも帰ってくるだろう。

洗濯機のところから青いバケツを持ってきた若葉は、それをひっくり返してそつと上に乗った。――背伸びは結構くたびれるのだ――。鍵は排水口か何かの鉄の格子に引っ掛かっていた。海が近いらしく微かに波の音が聞こえる。鍵はしばらくその縦縞の格子とぶつかり合っていたが、不意に強い流れが押し寄せて来て、とうとうその格子をくぐって外へ流れだした。大きな円筒形のコンクリートの塊にぶつかりながらやがて押しながす流れが弱まると、鍵は自分の重みで沈んでいつて止まった。

円筒形のコンクリートと思ったのは、海岸によく置いてあるテトラポットの足のようだった。鍵の沈んだそばのテトラポットはどう云う訳か足が平らに欠けていた。波がくる度にその平らな面と鍵がぶつかり合った。が、やがてそれもコンクリートの足の縁に鍵が引っ掛かると止まって、後は静かに波の音が聞こえてくるだけだった。

「ねえ雪江ちゃん、明日海に行かない」

その夜、若葉は雪江ちゃんに電話をした。

「いきなり、どうしたの？」

「お願い。捜し物があるの。付き合って」

「——うん。まあいいけど」

雪江ちゃんは何か言いたそうだったけれど、若葉の語調に気圧されてしまったようだ。

次の日、朝の八時にバス停で待ち合わせた若葉と雪江ちゃんは病院とは逆方面に行くバスに乗り込んだ。海辺りまではバスで三十分ぐらいだ。若葉のカバンの中には昨日机の引き出しの奥から引っ張りだした小学校の頃の夏休みの自由研究が入っていた。『わたしの町の水の流れ』。表紙にはそう書いてある。鍵を失くしたことが余程悲しかったのだろう。その年の夏休みに若葉は町の排水や下水の流れを調べて自由研究にした。市役所に排水の流れの載った細かな地図をもらいに行ったり、自分で歩いて回ってその地図にメモを入れたりして研究としてはなかなかの力作になった。けれど結局鍵を探す役には立たなかった。海の方まで流れたのだろうと云うことはわかったけれど、海岸は小さな鍵を探すには広すぎたのだ。

「ごめんね急に付き合ってもらっちゃって」

「いいよ。久しぶりに天気もいいし、ピクニックみたいじゃない。でも何を探しに行くの」

「着いてから話すよ」

バスを降りてコンクリートの堤防を越えると砂浜を右手の方に向かって歩き出す。若葉はカバンから地図を出して地形と見比べながらゆっくり進んだ。

「こつちよ」

昨夜、遅くまで地図をにらんで、あの溝から流れ着く排水口は調べてあった。

「ねえ、何を探すのよう」

「鍵よ。オルゴールの鍵。小学校の時ゴム跳びしてて落としたでしょ」

「ええ？」

あきれ顔で雪江ちゃんは立ち止まったが、若葉がどんどん歩いて行くので仕方なくまたついて行った。若葉は目指すテトラポットの山によじ登ると振り返って言った。

「ねえ、足が半分削れているやつを探して」

「あった」

三十分ほど経って大概に二人とも探し疲れ始めた頃、若葉の歓声があがった。急いで靴と靴下を脱いで「ちよつと持ってて」と雪江ちゃんに渡すとコンクリートの隙間に潜り込んだ。

「危ないよ」

「大丈夫」

両腕で体を支えながらゆっくり足を下ろす。

「うわあ。冷たい」

六月の水の冷たさが若葉の足先を通して全身に伝わってきて、ぶるっと体を震わせた。でも、何だかすぐつたい。すぐに心地良くなってきたその感触を楽しみながら若葉は身をかがめた。確か平らな面のふちに鍵は沈んだはずだった。けれど、幾ら目を凝らしてもコンクリートのふちには何も見当らなかった。違うテトラポットなのかしら？コンクリートの足に手をつけて若葉は考えた。

ふと思いついて、ふちに沿って積もっている砂を掘ってみた。指に硬いものが当たる。若葉がつまみ上げた物は、五年の歳月ですっかり錆びてしまっていたけれど紛れもないあのオルゴールの鍵だった。

「どう？」

頭の上から雪江ちゃんの声がした。

「ありがとう。あったよ」

返事をして若葉はズボンのポケットに大事に鍵をしまった。

「上がってこれる？」

心配そうな雪江ちゃんの声をよそに、テトラポットの上のふちに両手をかけると若葉は地面を蹴った。コンクリートの隙間から体が半分程出ると、後は懸垂の要領で体を起こして足を外に出した。長いこと家事をやりつけているから同年代の女の子と比べると、腕の力とはびきり強い方なのだ。

「若葉ちゃんのズボン、裾もお尻もびしょびしょじゃない」

雪江ちゃんが素っ頓狂な声をあげた。

「えっ？ほんとだ、どうりで冷たいと思ったわ」

夢中でかがんで鍵を探していたので、すっかり忘れていた感覚がようやく戻り始めた。

それからしばらく若葉はお尻を乾かしながらコンクリートの上に寝そべっていた。雪江ちゃんも隣に座って海を見ながらおしゃべりをした。

「鍵、見つかって良かったね」

一言そう言っただけで、それ以上雪江ちゃんは何も聞かなかった。若葉が言いづらそうにしているのが分かって気を遣ってくれたのかも知れない。若葉としても、重ねて尋ねられたら魔法の鍵のことを打ち明けようかとも思っていたのだが、やっぱり言うてはいけない話のような気がして気後れしていたのだ。だから、雪江ちゃんの気遣いはとても嬉しくて、心の中でありがとうと言った。

お昼前にお弁当を食べて、砂浜で穴を掘ったりして遊んだ二人は夕方頃バスに乗って町に帰ってきた。家に戻るとお父さんの道具箱から目の細かい紙やすりを借りて来ると、ポケットから鍵を出して丁寧に研いた。元々銅でできたこの鍵は思った程錆びもひどくはなくて、何とか使えそうだった。

飾り棚から宝箱を下ろすとひっくり返して底に付いているオルゴールのねじを一杯に巻いた。机の上に箱を置き直してそつと鍵を差し込む。勢いよくふたが開くと懐かしいロンドンデリーの歌が響いた。ぶどう色のビロードの上には虹色のおはじきや、ガラスのかけら、そして若葉が何より大事にしていた色とりどりのビーズと針金で作られた動物たち——きりんや亀やうさぎたち——が、つい昨日のように思えるあの頃と同じに光っていた。

「あら、懐かしいわね」

オルゴールを聞いてお母さんが戸口から顔を出した。

「その鍵、失くしたんじゃないの？」

「うん。でもまた見つけたの」

若葉はうわの空で応えながら、机の上に腕を重ねるとそれに頭をもたせかけてオルゴールに聞き惚れた。

8

6月30日の日曜日は朝から静かに雨が降っていた。退屈だなあ。窓の外を眺めながら若葉は思った。お母さんは定期検診で昨夜から泊まりがけで病院に行っている。お父さんは月に一度の日曜出勤で工場だ

。楽しみに残しておいた小説の最終章もさつき読み終えてしまったので、その余韻に浸りながらすることもなく雨を眺めていた。

そろそろ、試験勉強しなくちゃ。もうすぐ期末試験がやってくる。頭では分かっているけど体はちっとも動こうとはしなかった。

雨の音がやさしく若葉の耳に響くばかりの、静かな午後だった。インターホンの音が静けさを破った。

「はい」

若葉は立ち上がって玄関に走って行った。

「宅配便です」

扉の向こうで声がした。若葉は電話台の下から印鑑を出す。玄関の鍵を開けた。

「ごくろうさま」

大きな箱を受け取って印鑑を渡しながら言った。宅配便屋さんが帰り、扉を閉めてから改めて箱を見た。誰からかしら。差出人の欄を見て、ああと若葉は思った。佐山のお婆ちゃんからだ。お母さんの隣の部屋に入院していた佐山のお婆ちゃんはずいぶん良くなって、この前退院したそう。宛名はお母さん宛てになっていたので包みは開けずに下駄箱の上に置いた。

自分の部屋に戻ろうとした若葉は、今鍵を閉めたばかりの玄関の扉にふと目を止めた。そのままじつと扉を見つめていると、雨音がさあつと遠ざかっていくような気がした。

この扉の向こうには何があるのかしら？無意識のうちにポケットを探って魔法の鍵を取り出す。運動靴をつっかけるとゆっくり扉に近付いていく。鍵はいつもと同じように何の抵抗もなく鍵穴に収まった。持ち手を回す時、訳もなく喉が鳴った。カチャン、と音がして鍵が開いた。ノブに手をかけると細く扉を開いた。

白い――。扉の向こうが見えた瞬間若葉はまずそう思った。それが何なのかまるで分からなかったけれど扉の向こうは白一色だったのだ。若葉は扉をもう少し開いてみた。

真っ白な中に白いドアが見える。ああ、これは白一色の部屋なんだと気付いた。黒いツーピースを着た小柄な女の人が部屋の隅に二人いて、立ったり、かがんだり忙しそうに手を動かしている。時折りその人達が手元のテーブルに道具を置いたり、取ったりする音が微かに響くだけで白い部屋の中は静かだった。立っている方の女の人が小声で何か言って低い笑い声が起こったけれど、何を言ったかはよく聞き

取れなかった。

二人の仕事は間もなく終わったようで、テーブルの上の道具をしまおうと若葉からは見えない部屋の別の隅に歩いて行った。

二人の向こうには真っ白なドレスを着た女の人が背中を向けて座っていた。花嫁の支度をしていただけだわ——若葉は初めて気が付いた。

と、白い部屋のドアをノックする音が大きく響いた。

「若葉、支度はできたかい」

扉の向こうで若い男の人の声がした。花嫁は、すっと立ち上がりドレスの裾が大きく波打って広がった。

「今、行きます」

花嫁がこちらに振り返った。その人の顔を見て若葉は息をのんだ。白いドアのノブが回って、勢いよくドアが開く。弾かれたように若葉は玄関を閉めた。大きな音が家のなかに響いた。若葉は、しばらく息を整えるようにしながら目を堅く閉じて玄関の扉にもたれていた。

やがて、若葉は鍵穴から鍵を抜いて部屋に戻った。宝箱の中に魔法の鍵をしまつて、箱の鍵を掛けるいつものように箱を飾り戸棚に戻す。宝箱の鍵は引き出しにしまった。まだトクトクと鳴り続けている心臓を静めようとするかのように若葉は胸を押さえた。

それから、若葉は一度も宝箱を開いていない。ロンドンデリーが聞きたくなると机の上のチョコレートの箱を開くことにしている。――拓ちゃんに何かお礼をしなくちゃいけないなあ。少し甲高いその音楽を聴きながら、若葉は宝箱の向こうにいた拓也の横顔をぼんやり思い浮かべていた。

宝箱の鍵は相変わらず机の引き出しに大切にしまわれていて、若葉は時折りそれを取り出してはじつと見つめている。その小さな銅の鍵を見つめていると訳もなく頬が染まるのを感じて慌ててまた引き出しにしまうのだった。

9

それから10年の歳月が流れた。若葉は去年、司書の資格を取って今は町の図書館に勤めている。雪江ちゃんは、自称キャリアウーマンを目指しているとかで、電車で30分かかる大きな街の事務所に就職した。拓也は念願の電気会社で技師をやっている。

若葉と拓也は職場が同じ方向なので朝は大抵、一緒にでかける。いつもは若葉が誘いに行くのだが、たまに若葉が寝坊したりすると拓也が若葉の家にやって来て、聞こえよがしに玄関先で大声を出す。

「若葉 あ、支度はまだかあ」

その声を聞くとたびに若葉は、いつか遠い昔に聞いたことのある声のような気がして、懐かしい気持ちに包まれながら首を傾げてしまうのだった。

完